

法政大学 デザイン工学部 建築学科

法政大学デザイン工学部には、建築学科、都市環境デザイン工学科、システムデザイン学科を設置。その中であって、学科の枠を越えて建物の構造や技術開発、デザインや歴史など建築に関わる多様なカリキュラムが揃っているのが特徴です。



■大学生
上堀祐真 さん



■先生
陣内秀信 先生



■卒業生
山村まい さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

法政大学デザイン工学部の特徴を教えてください。



■先生

以前は工学部として小金井にキャンパスがあったのですが、都心型の研究をしようという趣旨のもと工学とデザインの分野でくれる建築学科、都市環境デザイン工学科、システムデザイン学科の3つを集めて市ヶ谷のキャンパスに移転してきたというのがデザイン工学部の始まりです。建築やデザイン、モノを作ることにリアリティを感じるには、市ヶ谷はとても魅力のある街。デザインというものはとても広い

範囲を扱っていて、ただモノを作るというだけでなく、社会をデザインする、街をデザインするということがも範疇になります。

建築は個人の住宅から都市空間まで、人々の生活、活動のための空間をつくり出す魅力ある分野で、構造や設備環境などのハード系と設計、デザイン、歴史などを扱うソフト系と大きく二つに分けられます。都市環境デザイン工学科はハードな土木的な分野に加え、その名の通り都市と環境とデザインまでも視野に入れたカリキュラムで、現代社会のニーズに応えるための幅広い分野を学ぶために開設されました。そしてシステムデザイン学科ではプロダクトデザイン、社会や組織のデザイン、

さらにはロボットの技術開発を研究している先生もいます。本当に幅広いんですよ。また、工学系にありながら女子の学生が多いのも本学部の特徴といえるかもしれません。これも都心にキャンパスがあることに由来しているのでしょうか。

もともと建築というのは、理系と文系の間にあるような学問です。工学的学問と人文・社会系、芸術も含まれます。工学というくくりには疑問を感じます。特に人間の人文的な要素、文学的要素も入るし、芸術としてモノを作る、デザインするという視点も入る。そのため工学系の中では少し異色の存在の学問でもあります。

一般的に工学では時代と共に進化する技術を考えますよね。しかし建築はそんなことはないのです。古代や中世のほうがよっぽど面白いモノを作っていることが多い。時代と共に作るモノ、使う材料や技術は変わっていきませんが、そこに実現される場所や空間はかつてのほうが豊かだったり、人を感動させたりすることも大いにあると思います。過去の経験を学びながら新しいモノを作る、そのため建築を学ぶ際には歴史を知ることが重要になるのです。工学系の中でそこまで歴史に注目するのは、建築の特徴だと思います。

その中で、先生の展開されている研究はどのような位置づけになるのでしょうか。

■先生

この説明は難しいですね。ない分野を開拓していると言ってもいいくらいです。一言で言うと『都市史』という分野になります。

建築の歴史の研究というのは19世紀ごろからあり、特にヨーロッパやアメリカでは建築教育の基礎として位置づけられていますし、日本でも明治の中頃から認識されるようになってきました。しかしそこでの研究対象とは神社やお寺などの宗教建築、大きな邸宅や宮廷などモニュメントとしての役割を持つ建物ばかりです。それが次第に自分たちの生活空間を理解する上で、町

並みや町家など人々の暮らしに密着したものの歴史を研究することも重要であるという考え方が出てきました。高度成長期までは都市の歴史を顧みることがなく、スクラップアンドビルドで街を作り替え、過去の蓄積をカウントせずに未来都市に向かって建物を造り続けていた時代が続きました。しかしそれではいけない、という動きが出てきたのが海外では1960年代、日本では70年代くらいのこと。そこにいる人間の想い、価値、生活があるということが見直され、住みかたの工夫や知恵の集積、なじんだ風景、地形を生かしたその場所にふさわしい建物と風景がどこにでもあるということにみんなが気づき始めたのです。お金をかけて一律に大規模開発をするということは、これらをなかったことにして、どこも同じ風景にしてしまうということ。合理的で機能的で経済的ではありますが本当にそれでいいのだろうか、よくないよね、という人たちが出てきました。それが日本における都市史のスタートになります。

東京では都市史的な視点も考慮した開発も考えられるようになってきましたが、地方都市はまだまだです。しかしヨーロッパでは地方の小さな街が魅力をアピールして発展しています。各地の成功事例を参考にしつつ、まずは東京の居住空間や都市の空間、建築が作り出す風景、建築と都市が一体になっているところへ都市の視点を交えていく、そんな研究をしています。研究というか、これからどのように街を作っていくかを考えるための研究ですね。



南イタリア・ガッリーポリでの調査時の思い出の1枚

先生がテーマとしているのはヨーロッパの都市と東京ということでしょうか。

■先生

ヨーロッパの中でも主にイタリアと、そして東京ですね。これまで建物を造るための技術だけを吸収し、古くからあるものを解釈し、生かしていくという技術がなかったのが日本。最近やっとその技術が発達してきたような状況です。そこでコンクリートジャングルのような東京という都市とは違い、現代から取り残されているかのようなヴェネツィアに視点を向けました。そこでは歴史のままの風景の中で人々が暮らし、緻密に構築された空間があり、時間をかけてさまざまな時代の論理が連結してできている街がありました。大小の広場、路地、住宅など小さな建築が輝いている。この街の歴史や存在を日本にも置き換えて考えてみたい、そう思ってイタリアと東京の都市史に向き合っています。

日本の近代化とは西洋化とも言われますが、そのお手本としていたのはイギリスやドイツ。そしてアメリカですね。しかし日本に近代西洋の文化が入ってきたのに、なんだか少し窮屈。日本人が豊かになるにつれ、もっと美味しいものを食べたい、もっと楽しいはず、もっと個性的なはず、もっと美を尊重したい。それらの欲求のお手本は、今まで見向きもされていなかったイタリアにあったんですね。そのことに一部の人たちが気付き始め、歴史的な街に価値を見出し、自然や食文化を大切にしている小さな街が輝いているイタリアが目されるようになってきました。イタリアと東京の両方を行き来しながら研究をしていると、それぞれの違いも共通点もよく見えてきます。両方のいいところを取り入れながら、都市の歴史を尊重しつつ街を発展させていこう、それが私の基本的な考え方です。

私はイタリアを中心に、イスラム圏も含む地中海世界を研究していますが、法政大学には中国などのアジア圏の都市の歴史を研究する先生もいますよ。

多様な文化に触れ、各国の風土を経験できるのも法政大学の特徴なんですね。

■先生

もともと法政大学は、教室にばかりいる学び方には馴染まない校風です。私は1976年に非常勤講師として本学に関わるようになり、以来継続して大学の中での学びだけでは物足りないと思っている元気の良い学生たちと、街へ出て意欲的に“何か”を探し続けてきました。このスタンスは教授となりゼミを持つようになってからも変わりません。研究室という場を中心に、学生たちとの関わりを強く持って共に成長していくことを心掛けてきました。

そんな先生のゼミを卒業した山村さんの学生時代の研究テーマと今のお仕事について教えてください。



■卒業生

学生時代には先生とイタリアへ行き、現地を調査して報告するプログラムに参加していました。そのときに学んだ現地調査の手法を生かし、卒業論文では都電と街づくりの歴史について言及しました。加えて、卒業設計では私の理想とする三鷹駅の設計をしました。自然を取り込んだ駅を作りたい、その点に着眼した設計です。三鷹駅には玉

川上水が流れているのですが、駅舎の下を潜るような形で水が流れているんですね。せっかくの自然が駅によって隠されてしまっている。それをもっと表に出して、駅の中でも人々が水のある空間を楽しめるような、水辺を復活させるための駅というものを設計しました。法政大学の特徴として、

デザイン工学部では卒業論文と卒業設計、両方を経験できるんですよ。

■先生

経験「できる」んじゃないくて、やらなきゃダメなの！

■卒業生

そうでした。研究室では都市の歴史に重点を置いて学んできたので、今度は新しい街づくりにも興味が湧いてきて、大手ゼネコンに就職しました。都市開発本部という街づくりに関わる部署で仕事をしています。仕事をしていて感じるのは、研究室で学んだことが自分の軸になっているということ。最終的にどのような街が素敵で魅力的に感じるか、その基準にぶれない軸を持っていることが仕事に生きています。

例えば、私が入社後初めて関わった案件は銀座にある商業施設なのですが、歴史のある銀座という街には、現代を生きる私たちが見てもカッコいいと思うものがたくさんあります。それと同じように、私たちが今作っている建物も、100年後の人たちが見てカッコいいって思ってもらいたい、それが私の考えの軸になっていると思います。大きな歴史のある街を新しくしていく、そんな仕事に携わる者としてぶれない軸を持つことは本当に大事なんです。

街づくりのコンセプトを作ったり、建物を造る人たちとやり取りを重ねてみんなの想いを形にしていくのが私の仕事です。商業施設にするのか、オフィスにするのか、そこから考えていくんですよ。先ほどお話した商業施設をデザインしたのは、外国のデザイナーさんなのですが、その方たちは日本の文化を建物に反映させたいと考えてくださって、江戸切子などをデザインに使っていくなどの提案をしてくれました。外国の方の視点で日本の文化を評価している、そこには新たな発見もあって面白いですね。

上堀さんは今、どんなことに取り組んでいるんですか？

■大学生

先生の研究室に入り、イタリアのアマルフィにあるコンカという街へ行ってきました。小さい街の中でどうやって建物が建っているか、なんでここにこの建物があるのかを実測し、街の人々に話を聞いたりしてきました。今はそこで実測したデータを図面化している最中です。

■先生

アマルフィ海岸という世界遺産になっている有名な都市があるのですが、その周辺にも魅力のある小さな街が点在しています。リアス式海岸になっていて、入り江ごとに街が発達している。コンカというのはその小さな街の一つです。山があり、段々畑の中に集落があり、海へ突き出す岬の手に漁師町があります。近代化の中で取り残されてしまっているような、歴史のある地域なのですが、ここを研究する人がイタリアにもいないので、調査に訪れると大歓迎されるんですよ。

■大学生

先生が何年間か継続してアマルフィ海岸の研究としてさまざまな小さな街を回っていく中で、今年はコンカが選ばれたため実測に参加したという流れです。現地に行ったのは4年生の夏でした。それまでは授業で先生が話していることを頭では理解できていたのですが実感がなかったというのが正直なところなんです。しかし、実際にコンカに行って街を見て建物を見て経験をする、そこでやっと「先生が言っていたのはこういうことだったんだ」とあらためてわかる瞬間が何度もありました。この実感するという経験は、その後の卒業論文や卒業設計でとても役に立ちました。授業の中だけでは、建築と歴史を上手く結びつけられなかったのですが、実際に実測をし、ちゃんと歴史を自分の目で見るという段階を踏んでいくことで建築と歴史が結びつき、捉え方がわかるようになる。歴史と土地、場所性みたいなことが理解できるようになりました。

卒業論文で扱った街は、イタリアではなく金沢八景です。私の住んでいる街であり、歌川広重が浮世絵に描いた場所を選びました。現代では金沢八景という場所の名前として認識されていますが、

あのエリアの8つの景勝地を歌川広重が絵に描いたことから金沢八景と呼ばれるようになったという背景があります。しかし歌川広重の存在が薄れて、地名として広まっていると感じたことから、その歴史を調べていきました。実際にデータとして残っているものを理解し、論文としてまとめていくときには、イタリアで学んだことが生かせたと思います。歴史をちゃんと言葉にして再現することができた、4年間の集大成である卒業論文でそのことを実感できました。

■先生

しかしよく4年生でイタリアに一緒に行ってくれたよね。

■大学生

早めに就職活動が終わったので、これはチャンスだと思って。行くことができて本当に良かったです。

●大学生活について

法政大学のデザイン工学部を選んだ理由を教えてください。

■卒業生

私は建築に関わる場所しか受験していません。自分の思ったものを形にすることに興味があり、それなら建築だと思ったのがきっかけです。法政大学を受験した理由は、教授陣のすごさ。雑誌で見たことのある先生たちが名前を連ねていて、そんな先生たちの授業を受けてみたいと思ったのが第一です。また、先ほど先生もおっしゃっていましたが、市ヶ谷にキャンパスが移ってきて2年目の入学にあたるのですが、都心にキャンパスがあるということも魅力でした。建築を学ぶ学生ってさまざまな建築物を授業の帰りに見に行ったり、展覧会や美術館に行ったりすることが多いのですが、都心にキャンパスがあると気軽に話題の場所にアクセスできるし、情報も集まりやすいのです。この環境に惹かれて入学しました。

私の出身高校の先生は「とにかく目標を高く持って受験しなさい」という考え方だったので、入試は受けられるだけ受けたという状況だったのですが、最終的に法政大学に入学できて良かったと思います。先生と環境、ここを選んで後悔はしていません。



■大学生

私は正直なところそんなに強い意志を持って受験をしていたわけではありませんでした。だけど建築の勉強をしたいということには変わりなかった。デザインに関わる仕事に就きたいと思って志望分野を決めました。

デザインの仕事に興味を持ったきっかけは、昔から授業中に落書きをしていることが多かったということにあります。描いていたのはいつも家具や「こんなモノがあったらいい

な、作りたいな」と思うような“モノ”。この落書きが大きくなっていけば、建物になっていくんじゃないか、そう思って建築に関わる学科を調べて受験をしました。

大学選びとしては、兄弟よりも偏差値の高い大学に入りたいという考えで選んでいったので、あまり大学ごとの特性を見ずに法政大学に入学しました。ここで良かったと今になって実感しています。その理由はやはり教授のラインナップ。本当にすごい先生たちに教えてもらっているんですよ。3年、4年になってゼミに所属するようになるとそのことをより一層実感します。イタリアに行けたこと、しかも陣内先生と一緒に研究をするというスタイルで海外に行ける機会って他大学ではあまりないのではないのでしょうか。研究室に留まることなく、先生と一緒に現地へ行き、そのイタリアでは信じられないような研究の方法に触れることもできました。先生は急に街を歩いている人に声をかけて、家に連れて行ってもらったりするんですよ。最初は信じられなかったです。

■卒業生

なぜか先生は上手く話を聞きに行くのです。

■大学生

断られる確率が低いのです。

■先生

今回はコンカの街の有力な方々が協力してくれたということもありますが、アマルフィで長く研究をしてきたことから街の人たちと私が仲良くなって信頼関係ができているという背景が大きいですね。アマルフィの名誉市民になっているのです。

そのため学生を私が連れて行くことを現地でも期待しているし、行けば歓迎してくれる。それに応えていきたいという想いもあります。

それだけの信頼関係があるから、学生たちと一緒に面白い研究ができるんですね。

■先生

せっかく行くんだから面白い家に行って話を聞いてほしいし、街のみんなに温かくしてほしい。行くからには今までの人生ではできなかったような体験をいっぱいしてもらわないといけないと思っています。自己負担で行くんですから、満足してもらいたいですし、効果を感じてほしい。今回は実測するには忙しすぎるくらい訪問する家がたくさんありました。

■大学生

めっちゃめっちゃ働きました！

■先生

そのぶん美味しいものもたくさん食べたでしょう。漁師町もあるから、料理は抜群です。

■大学生

はい！本当に美味しかったです。

■先生

これも魅力のひとつです。調査地を選ぶにあたって3つの条件というのがあって、ひとつはもちろん建築、街が美しく迫力があって価値があること。もう一つはホスピタリティがあるところ。それがないと家に入れてもらえないし、話をしてもらえませんからね。そしてもう一つが美味しいものがあるところ。この3つというのが実は文明の高さを示す指標なんです。だからこれらが揃っているところへ行けば間違いなく面白い研究ができる。個性豊かな建築や集落や文化があり、ホスピタリティがあるということは人々に余裕がある、せっかちでエゴイスティックな人ではだめなんです。美味しいものは自然が豊かな街だからこそ提供できる。どうも我々が研究に行く街というのは観光地という目で見られがちですが、楽しみだけじゃない理由がちゃんとあるんです。

他に法政大学のデザイン工学部を志望される学生さんの特徴はありますか？

■先生

だいぶ前の世代では、特定の先生を目指して入学する学生も多数いました。大学院で法政大学に入ってくる方も結構多く、私のところにはイタリアやイスラム圏を研究したいという人もいますね。それから他では対応できないような変わった研究をしたいと言う人もいますね。過去には風水と都市の研究の論文を書いた学生もいました。設計系では賞を取ったりメディアに出ている先生が複数いるので、その先生を探して入ってくる人が全国各地からやってきます。

これまでもカリキュラムの話は出ていますが、それ以外に入学後に履修した科目で印象的なものを教えてください。

■卒業生

私はフィールドワークの授業が印象に残っています。代官山の街の魅力的な場所を探し出し、それを模型にし、どのように魅力的なのかを分析するといったことを、7人くらいのグループで行ったのですが、この成果を西新宿の広場で発表するという経験もしました。

■先生

東京建設業協会という業界のプロモーションの一貫として、新宿駅西口の広場のところに模型を展示して発表するというイベントに参加したんです。建築関係の企業が模型を並べる中、我々のスペースも作らせてもらったのです。



■卒業生

学生のうちに社会の方々の前で何かを発表するという機会はなかなかありません。ですから、とても刺激的な時間になりました。私たちのような学生が考えたことを社会の方々に話をして、ちゃんと質問をしてもらえて。双方向でやり取りができた経験によって、実際に建築の分野で働いている人たちがどのような考えを持っていて、私たちの発表をどう感じるのかを知ることができ、本当に勉強になりました。

た。

フィールドワークの現場では、代官山の小道を取り上げました。人通りが少ないところに、なぜ新しい店舗ができていいのかと疑問に思ったことをきっかけに、そこにはきっと魅力があるはずだと実測をし、人や建物、通りなどとの距離感などをデータ化して分析し、グループのみんなの考えをまとめていきました。感覚的に理解していることを、実測したり分析することで、感じたことを言葉にし、数字や図面に落とし込んでいく。みんなが共有できる形にしていく経験ができました。また調査によって度胸もついたと思います。

■先生

毎回学生自身がテーマを選んで来るのですが、新宿のゴールデン街を片っ端から歩いて模型にした学生グループもあります。みんな度胸があつてすごいなと思いますね。新聞や雑誌で我々のフィールドワークが紹介されることも多々ありますよ。学生のフィールドワークの成果が注目される環境にある、これも学生たちにとっては励みになるのではないのでしょうか。

上堀さんはいかがですか？

■大学生

私はスタジオの授業が印象深いですね。デザインスタジオといって、設計技術の授業を1年生から4年の前期まで行います。一番最初の設計の授業では線も上手く引けない。そこから2年、3年と続けていくうちに、自分が作りたいものを自分の線で作っていけるようになっていきます。デザイン好きだったのでそれがすごく楽しかった。ゴールとして卒業設計があるので、自分がやってきたことが積み重なっていく、その流れが一番良かったですね。1年生のときの授業だけで終わるのではなくて、毎年積み重ねていく授業がスタジオの授業。成果が毎年生かされていくのが印象に残っています。建築学科らしいですね。

この授業のいいところは毎回先生が替わり、いろんな先生の見聞を聞ける。先生によって考え方も違って、矛盾することもあるんです。発表するときにある先生に言われたものを出したら、他の先生にこれは全然ダメだと言われて、どっちが正解なんだろうと考えながら、最終的に自分で正解を出していけるというのが楽しい。自分にとっての正解を選べるし、それを卒業設計として集大成に

できるのが一番の魅力です。

設計するものは授業ごとに場所だったり建物だったりさまざま。テーマに合わせたモノを設計していきます。そうやっていろいろなことに取り組んでいくうちに、自分は卒業設計で何を作るのか考えられる力がつきます。

何もないところから突然「好きなモノを作る」と言われても何をどうしたらいいかわからない。でもスタジオの授業での積み重ねによって、何を作るべきか技術と考え方の両方が身につくということですね。

■大学生

それでも卒業設計では先生の意見をたくさんいただきました。

■先生

設計スタジオでは専任の先生が責任を持って担当し、蒼々たる方々が講師としてたくさん来てくれます。そういう意味でも都心にキャンパスがあるというのはいいですね。忙しい中、最前線で活躍する若い建築家も講師として指導しています。設計の分野で個人の事務所を持って活躍している方々も多くいます。そういう非常勤講師の活躍が学生に見えるのがいいですね。学生が将来の道を選ばなかで、先輩たちの仕事ぶりを見ることで、建築の世界でどんな活躍ができるのかということを知る機会にもなります。

先生として注目してほしい授業はありますか？

■先生

私自身はオーソドックスな建築史の授業も担当しています。メインの都市史の授業で伝えたいことは、地中海の調査を踏まえて、どうやって歴史のある都市の魅力や価値を理解するのか、見方の説明です。それは自分の住んでいる、関わっている地域や街を発見する方法を学ぶということになるのです。単にここにはコレがあります、こういう歴史があります、といった事実を知るだけではなく、自分の日常的に関わっているものをより理解するための考え方を知ってほしいと思います。

みんなが注目しない何でもない街を発見するというのも、私のコンセプトです。例えば東京なら、江戸を下敷きとする中心部はみんなが注目する環境にありますが、それ以外のあまり注目されてこなかった周辺の街を取り上げ、この街がどうやってできているのか、過去と現代がどうつながっているのか、街の特徴は何なのかというところを、論理的に客観性を持たせて理解する、あるいは面白がるかという研究は、これまでなかった。都市史というのは意外に新しい研究分野になるのです。

都市史を通じて学生に伝えたいこととはどんなことでしょうか。

■先生

将来仕事として設計に関わっていく手段としては、個人事務所で働くにしても大きな組織に属するにしても、建築と都市の文脈や周辺地域との関わりを考え、建物を造ることによって周りにいい影響を与え、地域を生かし、地域とつながっていく設計をしてほしいのです。戦後の成長期の建築では無視されてしまいましたが、街のコミュニティや土地の個性を尊重することが建築に求められることです。コミュニティを壊すことなく都市を造っていく、その考え方のベースとなる授業が都市史であるという位置づけです。

街、人、歴史との関わりを考えられる人になってほしい、この視点はデベロッパーに就職するにしても絶対必要なことです。芯のある企画が提案できることが重要だと考えています。

●就職活動、仕事について

就職活動はどのように行っていましたか？

■大学生

大きな建物を建てたいと考え、ゼネコンへの就職を希望しました。まずは知り合いを通じて実際に働いている人たちの話を聞いてみようと、就職活動はゼネコンに勤務する方を自分で探すところから始めました。そこで話をしてくれたのが清水建設の方でした。その方の話を聞いて、大きな会社で大きな建物を造りたいという気持ちが固まりました。世界にも出て行ける、注目が集まるような建物にも関われる、それは自分にとってやりがいになるだろうと感じたのです。

就職活動の基本は、その会社にどれだけ入りたいと思えるかが大切ではないでしょうか。自分が入りたいと思っている会社や分野に強い興味を持って、迷わずまっすぐ進んでいくこと。興味を持つことが就職活動で一番大事なことだと思います。実は私は清水建設一社しか受けていないのですが、無事に内定をいただくことができました。

清水建設に決めた理由は何ですか？



■大学生

一番は縁があったことだと思います。たまたま出会って、仕事の魅力を教えてもらった。それと同時期にインターンとして清水建設に行くことができたのですが、そこでリクルーターとしてついてくれた方が、同じ研究室の先輩だったこともあり、なんだか呼ばれているような気持ちになったのです。

私は大学2年生でゼネコンへの就職を考えるようになって、現場を知ってみようと建設現場でアルバイトをしました。ゼネコンに就職すると施工管理の業務を担当することになるだろうから、実際の施工管理の現場がどうなっているか知りたと思いました。目標が定まっているのだから、先にどんどん動いてみようと思って…。

■先生

別のゼネコンに就職した卒業生から、浅草に大きな建物を建てる現場を担当したときの話を聞きました。浅草のように歴史のある街に関わると、その土地の有力者たちとの打ち合わせやミーティング、飲み会も頻繁にあるのだそうです。その席で街のウンチクを語れるということで、すごく街の人たちに愛されて仲良くなったそうです。また施工管理として建築現場の職人さんたちと関わっていくときには、そのプロジェクトにどんな意味があってどんな特徴があるのかという全体像を常に説明しているようです。他の施工管理担当者はそこまで話すことがないらしく、プロジェクトの目的をみんなで共有することで、働く人たちみんなのやりがいも大きく変わってくると言っていました。私のように技術そのものを教えるのではないゼミで学んだ学生が、施工管理で職人さんたちと接するメリットは、このような点にあるのではないかと思います。

山村さんの就職活動はいかがでしたか？

■卒業生

私はまちづくりの視点から幅広い企業を見ていきました。デベロッパーや鉄道会社も考えました。鉄道会社は鉄道沿線の都市の都市開発を行っています。しかしデベロッパーや鉄道会社は事業主なので決定権を持っている反面、開発するエリアは限られてしまう。ゼネコンであれば都内の案件も

あれば地方の案件もある、また行政と一緒にやる案件もあり、形にこだわらずさまざまな立場で仕事ができるのではないかと考え、最終的にはゼネコンに絞って就職活動を展開して行きました。

ゼネコンに就職するにあたり、重視したポイントなどありますか？

■卒業生

ゼネコンといっても大手5社だけ見ても社風が全然違います。面接の時も上手く話が通じない会社もありました。これから何十年も一緒に働いていくことを考えると、社風が合わないのはつらい。たくさんの人にとって、会社の雰囲気を知ろうと思い、就職の面接だけでなく、人づてに紹介してもらいたくさんの社員の方に会って志望を固めて行きました。

面接では自分をあまり作らず、自分らしさを評価してもらえそうな会社に決めようと考えていました。自分がこれからやりたいことを話し、自分らしさを出し、それで採用されることが将来の働きやすさに繋がると思ったのです。

仕事をしていてあらためて、大学での経験が役立ったと思うことはありますか？

■卒業生

先ほども言いましたが、陣内先生の授業は私が都市開発の仕事をする際の軸になっています。好きな街はどんな街か、どんな街づくりがしたいか、何をよしとするか。開発する街の歴史をちゃんと勉強して、その魅力をしっかりつかむことを意識しています。社会学など文系の学部出身の方がまちづくりの企画を提案することも多く、その視点も大切なのですが、一方で建築を学んできた人が主張するまちづくりの企画も求められているのではないのでしょうか。建築を学んだ上で歴史を学んだからこそできる提案というものがあるはずです。実際、就職してから先生に企画の考え方について相談したこともあります。

歴史的な街を開発するには、その街の成り立ちを理解していなければ良い提案はできません。ときに都市開発は地域の方に好まれない場合もあり、心苦しく思うことがあります。しかし、歴史と新しい街の共存を考え、より良い街に変えていくことができると考えています。

■先生

文化や歴史を持つ建物がないと、その街らしさが消えてしまう。それを大切にしつつ、どうやってまちづくりを実現していくかというのが、建築家やプランナーの腕の見せ所です。このような視点が取り入れられるようになったのは、ここ20年くらいのこと。それまでは、壊して、建ててのくり返しだったのです。

卒業生はどのような分野に就職していく人が多いですか？

■先生

時代によって変わってきています。まずは建築の設計をやりたい人が、どんな会社を選ぶかということも大きく変化しています。以前は個人事務所へ行く人がメジャーだった時期もありますが、働き方が不安定になりがちです。そこで大手設計事務所やゼネコンの設計部などを目指す人が増えて行きました。最近では鉄道会社でまちづくりに関わる仕事にも注目が集まっています。デベロッパー、鉄道会社、ゼネコン、この3つが多くの学生が就職していくジャンルです。

また自治体の街づくりに関わる部署に就職していく学生、特に女性はこの分野が増えています。制度の面で女性が働きやすいということもあるでしょう。また住んでいる人と関わりを持ちながらまちづくりを考えていくことにやりがいを感じる、そんな人には自治体が人気です。ハウスメーカーも大規模な企業は街づくりに関わるようになってきていて、デベロッパーと区別がつかなくなっているように思います。さらに住む人と強く関わりたいという視点から、リノベーションを行う企業を考える学生もいます。個人のニーズを聞き、職人さんたちとも深く関わる、それが楽しいと

いうタイプの人です。

変わった仕事としては、イラストレーターになって大活躍している女性もいます。私の本のイラストを描いてもらったことがあります。

● 5 年後に向けて

5 年後には先生の研究やお二人の仕事はどのように発展しているとお考えですか？

■先生

相変わらず東京とイタリアを行ったり来たりしているでしょう。イタリアだけでなく、東京という巨大都市も研究テーマとしています。法政大学全体のプロジェクトとして、江戸東京の都市研究の拠点を作ろうというものがあり、国際日本学と連動してさまざまなプランを展開しているところです。この成果を世界に発信していきたいですね。ライフワークとして海外に東京の魅力を伝えていきたいと思っています。

また、日本の地方都市がイタリアの活気づいている地方都市に関心を持っているという背景から、イタリアでの事例をもとに、日本の地方都市を元気にしていくための研究に取り組みたいです。お互いに比較し、学び合うことで発展していく。それが本当の国際交流といえるのではないのでしょうか。

■卒業生

ゼネコンは建物を建てていくだけでいいのだろうか、という気持ちが芽生えています。新規事業を担当する機会も増え、もっとまちづくりを重視したプロジェクトに関わっていけたらいいなと思っています。また1級建築士の資格を取得したので、自分の家を設計したいという夢もあります。都市開発本部の社員には資格取得が奨励されているので、がんばりました！資格があることで仕事の幅も広がります。名刺に“1級建築士”と描いてあると、ちゃんと建築を学んだ人なのだと、仕事で関わる人たちが対等に話をしてくれるようになるのです。

■大学生

就職は決まったけれど入社前なので自分が5年後に何をしているのかわからないのですが、施工管理の仕事は一人前になるまでに10年くらいかかります。5年後では、一人前にはまだまだですね。目標としては1級建築士の資格取得に向けて勉強を始めたので、まずは資格取得です。あとは、仕事を楽しんでいただけたらいいな。5年後…、まだ本当に想像がつかないです。きっと施工に関わる仕事をしていると思いますが、1年を通じてどんな仕事があるのか、5年続けたら何があるのか、まだ未知の段階です。

アルバイトで施工現場を見た経験などから、理想の働き方などは考えていますか。

■大学生

アルバイトだった立場の私が言うのも変ですが若い施工管理の方とは違い、ベテランになればなるほど、職人さんと施工管理の担当者との関係が良いと思いました。楽しんで仕事をしているのを感じられます。キャリアを重ねると余裕があり、仕事を楽しんでいるのがわかるし、常に笑顔で働いている。自分もそうなれたらいいですね。

● 高校生へのアドバイス

建築に関心を持っている高校生へのアドバイスをお願いします。

■先生

偏差値的に優秀な人が建築に向いているかという、そうではない。自分の好きな道を追究する、自分が何を好きなのかを見極めて、好きなことに突き進むような人になってほしいです。その中に

建築があればいいですね。

最近では、海外に行ってみたいという人がどんどん減ってきているのです。高校時代に海外に行く機会が制度としてあると思うので、チャレンジしてほしいですね。自分に見えていなかった能力や興味が発見できるかもしれません。探検しないとだめです。いろんな人に出会って話を聞いたり、自分の意見を伝えたり、話題になっている建築物を見たり、古い町で魅力あるところを体験することも大事です。パソコンでバーチャルな世界だけでわかったような気になるのではなく、体験しながら、身体で感じながら、人と出会いながら自分のやりたいことを見つけていけ！と言いたいですね。



受験勉強のアドバイスはありますか？

■大学生

テクニックというよりは勉強するきっかけを見つけることが大事ではないでしょうか。私は建築が学びたいという思いがあり、建築学科への進学は決めていました。入学したい大学や学部・学科がしっかりしていたからこそ、自分も頑張ることができました。目標ややりたいこと、やらなきゃいけないことを明確にして、無理矢理勉強するよりは自分の意志で自分のためにやらなきゃという気持ちを持てば、目標もクリアできます。

■卒業生

オープンキャンパスに参加して、建築学科の研究室に連れて行ってもらいました。研究室を見て、自分もこういうことを学びたいと具体的なイメージを持って勉強をするとやる気が出ました。オープンキャンパスで建築学科に入学したいんですよと言うと、先輩が建築学科の人をグイグイ連れてきてくれて、先輩といろいろな話しをすることができました。オープンキャンパスは楽しかったですね。建築を目指す高校の友だちと一緒に行って、先輩たちとの会話で入学への気持ちを高めて勉強をしていました。

■先生

世界史をはじめとする都市史の領域は、理系に分類されるデザイン工学部の受験科目にはないので、あまり勉強しないで入学している人が多いと思います。大学院では社会学や歴史や美術などを学んだ人が入ってきているのですが、学部では少ないのが実情です。もっと歴史に関心を持って勉強している人にも入学してほしいと思います。

法政大学のデザイン工学部の魅力を教えてください。

■大学生

高校時代の私は歴史が苦手で、授業が理解できないような生徒でした。しかし大学入学後、建築学科にも歴史があることを知り、歴史について学びたいと思い陣内先生のゼミに入ったのです。やりたいことをやれる、知りたいことを知ることができるのが大学で学ぶ面白さです。建築は幅広く学べる学問です。やりたいことを自分で選んで学べるのが建築学科だと思います。

■先生

必ずしも入学前に想定していた分野に自分の適性があるとは限りません。それで悩んでしまう学生も多いと思います。しかし建築はとても幅が広い分野なので、歴史というアプローチもあるのです。その中でも私たちが研究しているのは実践的な歴史で、建築とつながっていく歴史です。ここで知識を磨いて羽ばたいていく人もいます。好きな建築の世界で、自分がどんな道を見つけていくのか、それを探ることができる大学です。構造にも、設計意匠にも著名な先生方がいます。そして若い優秀な先生もたくさんいます。法政大学には建築というキーワードで、興味のあることを学べる環境

があります。

■卒業生

自ら知りたいことを求め、その欲求を発信していけば応えてくれる教授陣がいて、たくさんの経験をさせてもらった大学生活でした。興味があることを伝え、実際に見せてくれ、教えてくれる先生方がいます。また勉強を教えてくれた先輩や地図を見て一緒に街歩きをしてくれた先輩もいます。発信することで先生や先輩方との間に新しい交流が生まれ、その交流を通して興味も広がり、さまざまな角度からのアドバイスを受けることもできる大学です。

■先生

分野によっては垣根の高いことも多い建築ですが、法政大学ではその垣根がありません。もともと建築では計画・意匠系と構造系に隔たりがあると言われてきましたが、法政大学にはそんな境目はないのです。分野を越えて融合させながら研究をされている先生方がたくさんいますし、学部全体としても計画・設計系と構造系が一体となっていて、風通しがいいのが特徴です。風通しの良さは学生たちにも伝わり、教育にも現れています。カリキュラムの組み方の自由度の高さや、卒業研究や卒業設計の過程で、他の先生の知識が必要なら、最適な先生のもとへと学生を送り出すことも活発に行われています。専門とは違う分野の先生から意見を聞くことで、発見もあるはずです。建築というさまざまな分野が融合された自由な学問を思いきり学べる、そんな環境が整っています。

●インタビューに答えていただいた方々●



■先生

陣内秀信先生

法政大学デザイン工学部建築学科教授

東京都立西高等学校出身。東京大学工学部建築学科卒業・同大学大学院工学系研究科博士課程修了。1973 年より 2 年間、イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学留学。東京大学工学部助手を経て、1982 年より法政大学工学部専任講師に。助教授、教授の後、学部改変により 2007 年より現職。建築史、都市史が主な専門。地中海学会会長、都市史学会会長。



■卒業生

山村まいさん

大手建設会社 都市開発本部勤務

私立吉祥女子高等学校出身。2012 年法政大学デザイン工学部建築学科卒業。学生時代は陣内先生と共にイタリアでの調査、研究にも参加。卒業論文では都電とまちづくりの歴史をテーマとする。現在は大手建設会社にて建築の視点からのまちづくりに関わる。商業施設の企画や新規事業の立ち上げ、地域貢献も視野に入れた都市開発を担当。2015 年 1 級建築士国家資格取得。



■大学生

上堀祐真さん

法政大学デザイン工学部建築学科 4 年生（2016 年度取材当時）

横浜市立金沢高等学校出身。デザインの仕事に関心があり、自らの手で描いたものを形にしたい、大きなものを作りたいと建築学科に入学。大学 4 年の夏には陣内先生の研究に伴い、イタリアのコンカでの調査に参加。卒業論文は自身の出身地である金沢八景をテーマとした研究を展開。大学 2 年の時点でゼネコンへの就職を視野に入れ、施工現場でのアルバイトを経験し、仕事の現場に対する見知を広げてきた。清水建設株式会社内定。